

実習報告

レジャー・レクリエーション実習（夏季）

西表島をフィールドに自然資源を活かした観光を考える

遠藤 晃弘*

Field Trip Report on “Leisure Recreation Practicum (Summer) in Iriomote Island” in September, 2019

Akihiro ENDO

1. はじめに

本稿は、サマーセッション科目「レジャー・レクリエーション実習（夏季）」として2019年9月2日（月）～9月11日（水）（9泊10日）の期間に沖縄県八重山郡竹富町（竹富島・西表島）で実施した学外実習の報告である。美しい自然資源は観光客を引き付けるが、管理能力を超える観光客が押し寄せると、オーバーユースやオーバーツーリズムといった悪影響が生じる。これらは貴重な自然資源を有する国内外の地域にとって頭を抱える問題となっている。貴重さとともに、もろさも抱える島の生態系をどのように守っていくのか。観光客が来ることで自然が守られ、利用環境もよくなり、地域が活性化する観光の仕組みを検討する。なお、竹富島における実習内容は、本稿と切り分けて報告を行うことにしたい。

2. 実習の目的

東海大学は、西表島（沖縄県竹富町）に沖縄地域研究センターを設置し、亜熱帯地域における自然科学系の研究のみならず、社会的・文化的な研究も含めた総合的な研究を展開している。島内に研究施設は2つあり、事務局機能を有する浦内施設（2001年開所）と、船で渡って入る網取施設（1976年開所）がある。全国からの共同利用研究施設として、年間延べ3,000人の研究者や学生が利用する東海大学ならではのユニークな施設である¹⁾。

西表島は、エコツーリズムについて、小笠原や屋久島と共に先駆的な取り組みを行った地域であり、1996年に国内初のエコツーリズム協会を発足している²⁾。それまで相反するものと考えら

* 東海大学観光学部観光学科講師
投稿日 2020年12月31日 受理日 2021年1月20日

れてきた観光振興と環境保全を融合・両立させようとする取り組みが進められてきた。西表島エコツーリズム協会の設立をかわきりとして、全国でエコツーリズム推進を目指した推進組織や地域組織の設立が見られるようになった。2007年にエコツーリズム推進法が成立し、翌年に施行されるまでの過程の中で、西表島から発せられた問題提起や課題解決に向けた取り組みの事例は、国内のエコツーリズム推進・発展に貢献してきた。今日では、エコツーリズムの概念は、地域固有の歴史・文化や自然環境を保全しながら、持続的に地域の活性化を図るものとしてサステナブル・ツーリズム（持続可能な観光）をキーワードとした、これからの観光のあり方を考える上での根幹を成すものとなっている。さらに、日本の豊かな自然資源を体験できるエコツーリズムは、ニューツーリズムのひとつとして観光立国推進基本計画（2012年）に位置づけられ、地方創生の手段としても期待されている。エコツーリズムは、農業や漁業等の第1次産業や、農産物や海産物を加工する第2次産業と連携したツアーづくりをすることによって、地方の隠れた魅力を引き出し、地方創生への強力な手段のひとつとして考えられている。

これらの背景を踏まえ、西表島が、エコツーリズムを学ぶ上で象徴的かつ重要な地域であると同時に、東海大学沖縄地域研究センターが設置されているという好条件を活かし、本実習は3つの要素で学習内容を設定した。第一に、沖縄地域研究センターを拠点として、西表島ならではの自然資源がどのようなものかを体験として学ぶことである。マングローブの森や、湾内のサンゴ、山や川に生息する生物などを実際に自分の足で歩きながら観察し、多様性に富んだ西表島の自然の本質やその保全活動について考える。第二に、伝統的な歴史を今に受け継ぐ小さな「集落」に滞在させてもらい、島の暮らしと観光のつながりについて学ぶことである。島民から、祭事や文化、風習について教えてもらい、自然と共に生きる暮らしの文化を体験する中で、観光とのつながり考える。第三に、観光利用と環境保全の両立について、世界自然遺産登録に向けた取り組みの把握や、リゾートホテルの立場から観光客誘致の戦略や環境負荷軽減の取り組みについて学び、観光振興が地域にもたらすインパクトを学ぶことである。島内における包括的な観光利用に対する管理の在り方について自ら考える機会とする。これら3つの柱からなる実習を通して、西表島をフィールドに、どのようにすれば、美しい自然や伝統文化を残しながら、地域社会が持続的に発展できるのかについて考えていきたい。

表1 本実習における主な学習内容（西表島）

月日	主な学習内容
9月5日（木）	環境省西表野生生物保護センター（レクチャー：イリオモテヤマネコの生態と保全） 沖縄地域研究センター（ガイダンス：西表島における実習内容について）
9月6日（金）	集落プログラム ①人と自然の共生する島の暮らし（祖納集落にて手わざ体験） ②レクチャー： 祖納集落における暮らしと文化
9月7日（土）	沖縄地域研究センタープログラム 巡検：西表島のトレッキングルート観察（マーレ川及び大見謝川周辺）※悪天候によりプログラムを変更（予定はウダラ川でのトレッキング）
9月8日（日）	集落プログラム ①島の文化体験（白浜集落にてサバニ体験） ②レクチャー：白浜集落における 暮らしと海神祭
9月9日（月）	沖縄地域研究センタープログラム 巡検：人間活動によって分断されていない連なる亜熱帯環境の 自然と生物（網取湾でのスノーケリング）
9月10日（火）	リゾートホテルプログラム ①アクティビティ：秘境ナララの滝へダイナミック西表島アドベンチャー ②レクチャー：リゾートの経営戦略と環境保全について（支配人）

3. 西表島

3.1 西表島の観光概況

西表島は、沖縄県の中で沖縄本島の次に大きな面積をもつ島である。日本で最南端の国立公園であり、島のほぼ全域が、西表石垣国立公園に指定（1972 年）されている。原生状態に近い亜熱帯性常緑広葉樹林やマングローブ林、サンゴ礁など、亜熱帯特有の自然景観を有し、イリオモテヤマネコをはじめとする貴重な亜熱帯の動植物が生息する。

大自然をフィールドに、マリンレジャー（カヤック、スノーケル、ダイビング、フィッシングなど）のほか、トレッキングなどの陸上のレジャーに加え、遊覧船に乗って川を遡上するジャングルクルーズや、海を渡る水牛車に乗るアトラクションなどが盛んに行われ、観光客に対して豊かな自然体験の機会を提供している。ミシュラン（2020 年）のグリーンガイド・ジャパンで、西表島は二つ星の評価を得ている。

西表島には、島西部（上原港）には約 7 万人、島東部（大原港）には約 22 万人、年間合計約 29 万人の観光客が訪れている（図 1）。2007 年には西表島全体で約 40 万人を超える観光客が訪れていたが、直近の 10 年間は、周遊型観光の需要が減るなどの外部条件の影響を受け、増減を繰り返しながら、全体としては緩やかな減少傾向が続いている³⁾。

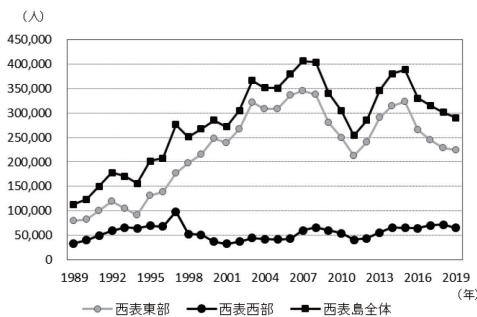


図 1 西表島の観光入域者数

出典：竹富町（2020a）をもとに筆者作成。

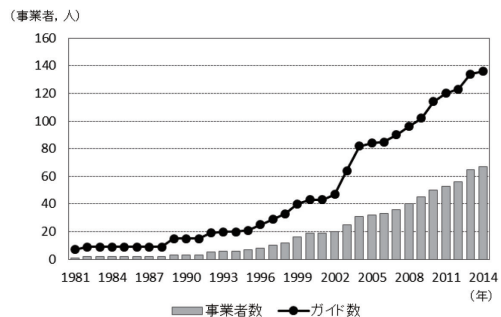


図 2 西表島のツアー事業者数

出典：環境省那覇自然環境事務所（2014）をもとに筆者作成。

3.2 過密化するツアー業者

島内には、大小 40 本を超える河川があり、図 2 のとおり、これらを利用したツアー業者（カヌーやトレッキングなど）は増加傾向にある⁴⁾。ツアー業者の中には、ツアー用具の放置や、生態系に影響を与えかねない無秩序なツアーを行っている例もある。特に、自然体験ツアーで人気を集める島北部のヒナイ川周辺では、環境省西表自然保護官事務所によると年間で推計 4 万人を超える観光客が入域し、ピナイサーラの滝つぼが過密化している⁵⁾。利用者の快適性が低下するだけでなく、カヌーによってマングローブの根が損傷し、観光客の踏圧による樹木や岩への被害などが発生している。西表島では、観光利用による生態系への悪影響への対処が突出した課題で

あることは、2017年に国際自然保護連合（IUCN）が現地調査を行った際にも指摘されている^{9）}。現状は、限られた河川で独自のルールに基づく自主規制がバラバラに行われているだけで、西表島に何人までの観光客なら入域させることができるのか（観光客の収容力）に関する定めはない。世界自然遺産の登録に向けて、島内における包括的な観光利用に対する管理が求められている。

カヌーやスタンドアップパドル（SUP）は、事業展開において、初期投資が小さくて済むことから、知識と経験が少ないガイドでも新規参入がしやすい特徴がある。西表島の自然資源に誰もがオープンアクセスできる以上、魅力が知れ渡るほどこの傾向は顕著になる。共有資源の乱獲によって、資源が枯渇する現象は、Hardin（1968）の「コモンズの悲劇（tragedy of the commons）」で説明されているが、この状況が続くと、自然への影響のみならず、事業者と島民の関係は年々希薄になり、島の魅力を体感できるとは言い難いような付加価値の低いありきたりのツアーが増加する恐れがある。

実際に、西表島においては、観光業が盛んに行われる一方で、自然環境や住民生活に様々な影響が及んでいる。レンタカーやツアー送迎による交通量の増加、スピード超過等のマナーの低下などの人的な要因によるイリオモテヤマネコなどの希少生物が交通事故にあうケースが増えている。観光客による外来種の侵入や植物の採取等が増加したことにより、希少な生物への影響が懸念されている。さらに、観光客の影響で、島民が生活の足として利用している定期船が満席となり、生活に支障をきたす状況も発生している。観光政策は、これまで誘客を意識したものが中心であったが、これからは観光客の無制限な入域によってもたらされる資源荒廃や枯渇にも目を向けなければならない。つまり、誘客と管理はセットで推進されるべきである。



図3 森の中に置かれたカヌー
(2019年9月、筆者撮影)



図4 実習中に体験したツアー
(2019年9月、筆者撮影)

3.3 世界自然遺産登録を目指す西表島

西表島は、「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」として世界自然遺産登録を目指している。2003年の「世界自然遺産候補地に関する検討会」で、琉球諸島は、大陸とつながっていた地史の中で生き物が独自の進化を経て多様化し、絶滅危惧種なども多く生息していることから「生態系」と「多様性」の視点で評価され、候補の一つとして選定された^{7）}。

世界自然遺産に登録されるためには、その資質を損なわないような普遍的な価値の維持・保全が必要とされる。登録の実現後も、観光産業等によるオーバーユース（過剰利用）で自然環境が

劣化することがないようにしなければならない。世界自然遺産の登録に向けて西表島は、すでに指定されていた西表石垣国立公園を拡張し、ほぼ全域が指定区域となった⁸⁾。法的規制を強化することでより確実に固有種や生態系を守る体制を強化している。

2018年の段階では、IUCNから登録延期の勧告を受け、一旦申請を取り下げている。世界自然遺産候補地に対する評価報告書では、収容力に応じて適切な訪問者管理メカニズムを設けるべきことなどが指摘された。現在は、指摘された内容を修正し、再申請を行っている段階である。登録審査が行われる世界遺産委員会は、2021年に中国の福州市で開催される。

3.4 持続可能な西表島のための来訪者管理基本計画

世界遺産委員会への再申請にあたり、環境省地域連絡会議西表島部会によって「持続可能な西表島のための来訪者管理基本計画」（2020年）を策定した。島内における包括的な観光利用に対する管理の実現に向けて、推薦地、緩衝地帯、周辺管理地域の各地域区分ごとの観光利用の受入れ概念が設定された（図5）。地域を訪れる地域外からの来訪者をインフォメーション機能にて旅行目的別に適切に誘導・管理し、推薦地には、利用コントロール機能を通じて限定的な自然体験観光を受け入れる考え方である。

計画の中で、西表島における来島者管理の目標は、「観光による環境・住民生活への影響を抑制するとともに、観光による地域社会への波及効果をさらに広げ誇りある島の自然と暮らしを将来にわたって守り受け継ぐ」と定められている。

西表島においては世界自然遺産登録による入域観光客数の過度な増加と、環境・社会両面に生じる影響を最小限に抑えるため、4つの観点から指標と基準値を設定し、影響をモニタリングしながら、必要に応じた対策を講じる方針である。「観点①年間入域観光客数を指標とした受入容量の管理」は、過去の入域観光客の傾向を踏まえた年間入域観光客数の総量の基準値を設定（年間入域観光客数の総量の基準値＝33万人）し、それを基に1日あたりの入域観光客数の基準値を見直すものである。「観点②1日あたりの入域観光客数を指標としたピーク時の受入容量の管理」は、ピーク時における住民生活（上下水道の供給能力）への影響を回避するため、上水道の供給容量を指標とした観光客数の1日あたりの受入容量の基準値を設定（入域観光客数の1日あたりの受入容量の基準値＝1,230人）し、これを超えないように分散と平準化を図るものである。

「観点③宿泊率・平均宿泊数を指標とした観光形態の管理」は、入域観光客の宿泊率及び平均宿泊数を指標として設定（宿泊率の基準値＝22%以上、平均宿泊数（宿泊者）の基準値＝1.55泊以上、平均宿泊数（全体）の基準値＝0.34泊以上）し、滞在型観光を主体とする観光形態の変化を把握するものである。「観点④住民生活への影響と効用を計る新たな指標設定による観光管理」は、必要なデータを整理・蓄積し、観光による住民生活への影響と波及効果を計る新たな指標を設定することで、影響の抑制と波及効果の拡大を推進するものである。国内各地のDMOが力を入れている「観光貢献度の可視化」と類似している。

基本計画では、西表島主導の来訪者管理体制の構築し、自然を損なうことのない持続的な利用の実現させるため、環境負荷の低減のための来訪者費用負担の導入についても記載されている。自然環境の保全や基盤施設の維持管理などに活用するための費用を観光客から「入域料」として

徴収する仕組みを構築する。入域料の収受と管理は、別途立ち上げを予定している西表財団（仮称）において行われる予定である。竹富島では 2019 年から「地域自然資産法」を活用して、観光客から入島料（ひとり 300 円）を徴収する取り組みが始まっている⁹⁾。徴収額の伸び悩みが課題となっているが、同じく入山料の伸び悩みを課題としていた富士山が法定外目的税として義務化する方針を打ち出している¹⁰⁾。自然資源を保全し、持続可能な観光を考えるための仕組みとして引き続き注視していきたい。

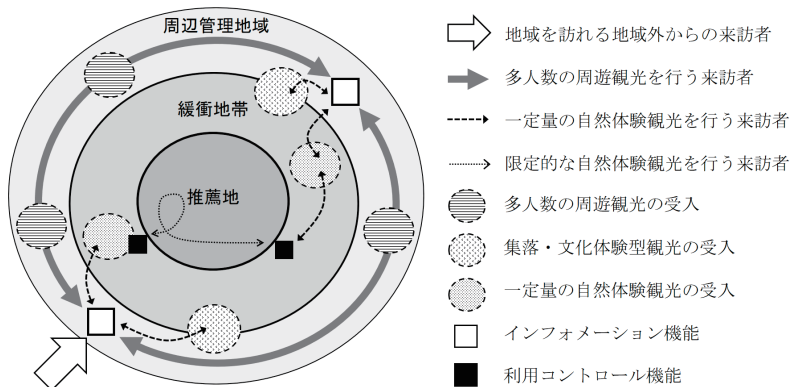


図5 地域区分ごとの観光利用の方針
出典：環境省（2020b）をもとに筆者作成。

3.5 沖縄地域研究センター（網取施設）を拠点とした巡検

西表島では、沖縄地域研究センターの協力を得て、「崎山湾・網取湾自然環境保全地域」として保全されている網取湾をフィールドに巡検を行った（図6）。網取湾は、亜熱帯の森から、溪流、マングローブ河川、そしてサンゴ礁まで、環境が人間活動によって分断されることなく連なっている。

荒天のため、網取湾奥に注ぐウダラ川（延長約2 km）を遡上する巡検を行うことはできなかったが、ウダラ川流域は、自然体験型の観光客の入山が少ないエリアであり、ほとんど人の手の加わっていない原生の状態が保たれている。河口付近は、川から流れる淡水と海水が混在した汽水域と呼ばれ、主にヤエヤマヒルギやオヒルギなどのマングローブ林が広がる。干潮時には干潟が出現し多様な生物相を形成している。ウダラ川のようにマングローブ林の発達した河川は、マングローブ林から落ちた葉が、甲殻類や貝類の餌となっている。樹木が密生しているため河川の流れが緩やかで、小さな生物や隠れ家が豊富にあり、稚エビや稚魚にとって格好の生息場となる。またそれらを餌とする魚類がマングローブ林に侵入する。そのため、マングローブ林のある河川はマングローブがない河川に比べ生物相がより豊富となる¹¹⁾。実習では、ウダラ川の上流から中流そして河口に向けて環境と生物がバランスを保って生育している生態系をレクチャーにて学習した。

ウダラ川が注ぐ網取湾では、スノーケリングで、河川からの淡水や懸濁物の影響を受けやすい湾奥から、波浪の影響を受けやすい湾口まで、環境に応じて移り変わるサンゴ礁を観察した。2016

年から 2017 年にかけて八重山諸島を中心に夏季高水温によるサンゴの白化現象が発生し、大きな被害をもたらした¹²⁾。環境省生物多様性センター（2016）によると、この海域では、1970～80 年代のオニヒトデの大発生によって、ほとんどのサンゴ群集が死滅した過去があり、その後は、開発に伴う陸地からの赤土流出や生活排水などの人為的な攪乱がある中で徐々に回復していた。今回の白化は、地球温暖化や台風による海水の攪拌がなかったことなどが影響し、海水温の高い状態が続き、サンゴの中に生息して栄養を補給している褐虫藻が失われたことが原因とみられている。

問題の原因は、島ではなく地球規模での気候変動にある。エルニーニョ現象や地球温暖化の影響が西表島周辺海域の海水温を高い状態にしている。間接的ではあるが、都市部の生活者の暮らし方が遠い西表島の海に影響を与えていると考えられる。サンゴは海中における森のような存在であり、多くの海洋生物が生息している。サンゴが白化・死滅すると、そこで共生していた他の海洋生物も減少する。サンゴ礁周辺で獲れる魚が減少すると漁師や集落で生活する人間の生活に影響が生じる。一般的に、サンゴと人の生活のつながりを意識することは容易ではないが、それを考えざるを得ない実態を目の当たりにした。

スノーケリング中に観察した生物にアオウミガメがある。世界的にアオウミガメの産卵が増加傾向にあり、日本においても主要な産卵地である小笠原諸島や八重山諸島西表島では産卵個体群の増加が報告されている¹³⁾。水谷ら（2018）の報告によると、近年の八重山諸島では、草食性のアオウミガメの個体数の増加が指摘されており、アオウミガメによる過度な摂餌によってウミシヨウブなどの海藻群落の衰退や消失が懸念されている。ウミシヨウブは、沖縄県や環境省のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類として掲載されている海草で、八重山諸島は生息分布の北限域にあたりウミシヨウブが密生する群落は西表島に限られている。ウミシヨウブ群落の完全な消失を防ぐために、保護を目的とするゲージを設置するなどの対策が求められている。設置や維持管理に関する労力や費用、景観、往来する船舶やスノーケリング等のマリナー客の安全など総合的に考慮した保護策が求められている実態がある。

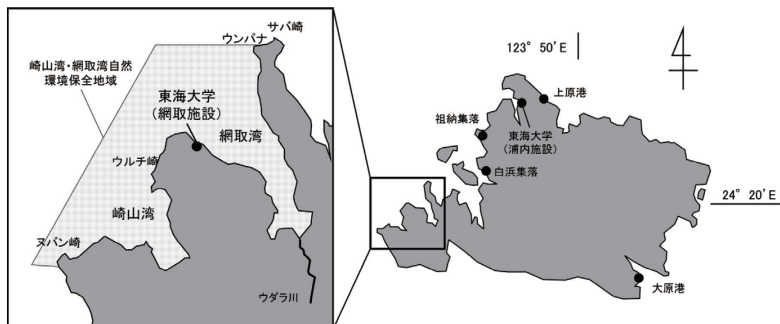


図 6 西表島における実習フィールドの位置
出典：環境省（2016）をもとに筆者作成。

3.6 祖納集落における暮らしの文化体験

祖納は、西表島の西部に位置し、島では最も古い歴史がある集落のひとつである。2020 年 11 月現在、祖納の人口は、145 人（平均年齢 48.1 歳、65 歳以上 46 人、15 歳以下 26 人）でゆるやかに人口が減少し高齢化が進んでいる¹⁴⁾。祖納には、稲作文化を大切にしたい暮らしが今でも息づいており、島民は、海・山・川の自然の恵みによって支えられた生活をしている¹⁵⁾。

その象徴が沖縄県指定文化財として、島民の手によって大切に保存されている「新盛家住宅」である。築 150 年と推定される建物で、沖縄県内に現存する最古の木造茅葺き民家である。家屋は、釘や金具を使わずに楔で締められており、柱や梁には島内産の木材が用いられている。敷地はテーブルサンゴを積み上げた石垣で囲われている。現在でも、集落の人々の手によって萱の葺き替えがなされている。また、集落の最大行事である「節祭（シチ）」は、約 500 年の間、五穀豊穡と島民の健康と繁栄を祈願し、暮らしの支えとなって伝承され、重要無形民俗文化財に登録されている。

島の暮らしは、昔から資源が乏しく、自然の素材から作った民具が生活を支えてきた。実習では、集落に住む星 公望氏から、クロツグやアダン等の自然素材を使った民具づくりを教わる体験を行った。民具づくりは、生活を支える道具として、また、おもちゃがなかった頃の遊びとして大人から子どもに伝承されてきたものである。観光客用の土産物としても有名な「指ハブ」は、指に食いついたハブを強く引くと余計に離さない構造になっており、ハブの怖さや自分ばかり欲張ってはいけないという教訓が込められている。

また、沖縄では、伝統的な船として「サバニ」が知られているが、祖納では、2013 年に一本の大きな松の木をくり抜いてつくるサバニの原型となったマチキブニ（松木舟）を復元するプロジェクトが実施されている。復元の際は、公民館が主体となり、地域の長老の指導のもと、当時の製作過程を忠実に再現しながら、集落内の山からリュウキュウマツの巨木を切り出して舟をくり抜く作業が行われた。先人から受け継いだ知恵を絶やさずに継承していこうとする集落の姿勢を感じ取ることができる事例である。

3.7 白浜集落のサバニと海神祭

白浜集落は、島内の外環道路が行き止まりになる最西端に位置し、かつては炭鉱として栄えた歴史を持つ集落である。2020 年 11 月現在、白浜の人口は、人口約 121 人（平均年齢 42.1 歳、65 歳以上 31 人、15 歳以下 30 人）である¹⁶⁾。白浜公民館が管理する「海人の家」は、沖縄体験滞在交流促進事業として整備されたユニークな施設で、公民館の集会所に宿泊施設が併設され、運営は白浜公民館が担っている。町が地域住民の創意、工夫を活かして行う体験滞在プログラムを展開するための施設である。本実習では、この施設を宿泊場所として利用した。

白浜集落には白浜港があり、「海神祭」¹⁷⁾と呼ばれるサバニでの船漕ぎ競争が行われている。サバニは、沖縄の海人が漁で使っていた木造の小型舟である。かつては、安全航海と豊漁を祈願する行事だったが、今では、漁業従事者が少なくなり、地域全体のお祭りとなっている。集落の公民館の青年会が主体となり、20 日前から準備と練習が開始される。海神祭は、2 日間かけて行われ、レースは、東西対抗、学校対抗、職域対抗、婦人対抗、公民館対抗（メイン）という区分が

ある。レース以外にも、出店や余興、抽選会等のイベントが開催される。島外に出た者も、行事の際には島に帰ってくることが多く、特に、若者が継承していくことが大切にされている。白浜は、炭坑に人が集まって形成された集落のため、祖納のような伝統的な行事がなく、その代わりとして海神祭が定着した背景がある。

漁業から観光業へ産業構造が変化する中で、サバニの保存や海神祭を行うことの意味合いに変化が生じている。文化を守るには島民がそのことに何らかの価値を見いださなければ続かない。30年以上続いている海神祭も、社会状況が変化する中で、存続の方法が課題となっている。実習では、白浜公民館からサバニを借りて、「やっこ」と呼ばれる伝統的な櫓で実際に海を漕ぐ体験を行った。漕ぎ手約10名が心をひとつにしなければ、サバニはまっすぐに進まない。海神祭とサバニをテーマとして、集落と行事の在り方を検討することができた。今後もサバニを維持・保存してためには、コストがかかる。そのコストの一部を白浜集落の来訪者に向けて体験プログラム化することで、その収益をサバニの保存に役立てるサイクルを生み出す取り組みが検討されている。地域行事を支える観光の在り方として注目したい。

3.8 西表島の大型リゾート

西表島で2004年に開業した島内初の大規模リゾートホテル「西表サンクチュアリーリゾート ニラカナイ」は、リゾート建設による観光利用と環境保全を考える象徴のような事例である。2002年にリゾート建設の計画が打ち出された当初から、地元住民との間で賛否の声が渦巻き、訴訟となった¹⁸⁾。リゾート建設予定地のトゥドゥマリ浜（月が浜）が、神聖な浜として島民の間で古くから大切にされてきた場所であったことに加え、この浜はウミガメが産卵し、貴重なトゥドゥマリハマグリなどが生息していたからである。島民以外にも本土からの支援者など多くの人を巻き込んだ住民運動に発展した。結果として、建設工事差し止め及び撤去を求めた民事訴訟は、破壊や侵害の程度が社会生活上、受任すべき限度を超えるようなものではないとして棄却されている。

リゾートは、地上4階の建物に、客室約140室という島内随一の規模を誇る¹⁹⁾。規模の大きさから、排水やごみ処理などによる島への負荷が心配されたが、それに加えて、島内の宿泊施設は、ペンションや民宿など規模の小さい施設が多いため、宿泊客の取り合いや人手不足も懸念された。一方で、西表島西部は、東部に比べ観光入域者数が少なく、課題であった通過型の観光から滞在型の観光を推進するための拠点としての期待もあった。リゾートの建設によって、島内に滞在する観光客が増えても、そのことによって島民やその他の事業者にも恩恵がなく、かえって負の影響が大きくなるようでは本末転倒である。リゾートによる適切な環境保護活動が施され、観光収入が地元を素通りしないよう、地域との調和と共生を図る観光の在り方を模索していく姿勢が重要である。リゾートは様々な環境負荷軽減²⁰⁾に取り組んでいるが、上述したリゾート開発の経緯から、これまでに地元との対話が十分になされてきたとは考えにくい。近年は、リゾートで働く島民が増えてきていたり、近隣の道路に建てられていたリゾート反対の大きな看板が撤去されたりするなど、改善の兆しも見えてきているが、根深い課題を抱えたまま現在に至っている。

2019年からリゾートの所有と運営は、星野リゾートが行っている（物件は星野リゾート・リゾート投資法人が取得、名称は「星野リゾート 西表島ホテル」に変更）。コンセプトは「イリオモテ

ヤマネコが棲む島の、ジャングルリゾート」を掲げ、亜熱帯ラグジュアリーに満ちたリゾートホテルのホスピタリティを売りにしている。ジャングルリゾートとして忠実な滞在魅力を演出し、コンセプトに沿った体験価値を提供する取り組みを目指している。その特徴として、フロントと横に並ぶ形でアクティビティデスクが設置されている。ホテル専属のアクティビティストッフらが、ツアー参加者のニーズに合わせた様々なプログラムを案内している。アクティビティ用の装備を持参せずに宿泊した観光客でも気軽に参加することができるように、ツアー料金にレンタル料が含まれている。

実習で体験した「ナーラの滝ジャングルトレッキングツアー」は、西表島のアクティビティの魅力凝縮したツアーで、ジャングルクルーズ、カヤック、トレッキング、滝遊び、生き物観察、亜熱帯植物観察などが体験できる。当ツアーの目的地である仲良川は国立公園に登録されており、船舶の乗入れ規制の地域である。リゾートはエコツアーなどで定期的に船舶を運航する営業許可を取得して観光客を輸送している。白浜港から小型船にゆられながら仲良川をさかのぼり、その後ジャングルを1時間ほどトレッキングすると、落差18mの壮大なナーラの滝が姿を現す。復路は、シーカヤックでジャングルを約8kmクルージングするというアドベンチャー感のあるツアー行程であった。アクティビティの体験を通じて、プログラムの充実度や安全面における配慮は感じ取れたが、自然や地域の文化の背景に潜む意味や関連性についての解説はあまり感じ取れなかった。ツアーに参加した学生の実習ノートからは「観光客の獲得が目標になっており(中略)島人が今まで共生し大切にしてきた自然を島人と一緒に守ろうとする姿勢があまり感じ取れなかったのは残念に思った」という記述を確認した。表面的な楽しみだけでなく、参加者が主体的に保全に対する意識を高められるツアーの在り方を検討することができた。

持続可能なツアーを考えるにあたりガイドの重要性は高まっている。竹富町は、竹富町観光案内人条例(2020年)をスタートさせ、免許制度を取り入れている。環境省は、一部の国立公園において、ガイドによるツアー料金の一部を保護活動などに充てる取り組みや、希少生物の生息地などに立ち入る際に入場料を徴収する方法を試験的に試みている²¹⁾。今後は、生態系保護を観光客に支えてもらう取り組みが各地で本格化すると考えられる。西表島においても対応を注視していきたい。

3.9 アドベンチャーツーリズムへの期待

観光庁は、欧米豪富裕層が好むアドベンチャーツーリズムについて、「日本は自然由来の体験型コンテンツを提供するための自然資源が豊富であるほか、日本固有の自然資源も有することから、他国と比べても観光資源化するポテンシャルが大きい」として自然体験型観光コンテンツに注目している²²⁾。Adventure Travel Trade Association(ATTA)は、アドベンチャーツーリズム(アドベンチャートラベルとも呼ばれる)を「自然(Nature)」「異文化体験(Culture)」「アクティビティ(Activity)」のうちふたつ以上の要素を持つ旅行と定義し、5つの体験価値として「今までにないユニークな体験(Novel and unique experiences)」「自己変革(Transformation)」「健康であること(Wellness)」「挑戦(Challenge)」「環境や地域社会への影響(Impact)」を掲げている²³⁾。ATTAとイーストカロライナ大学の共同研究(2017)によると、今日のアドベンチャートラベラーは、

自己変革をもたらす体験を求め、世界観を広げ、自然の中で時間を過ごすことに関心を持っていることが明らかになっている²⁴⁾。つまり、単なる旅先での自然体験を指したものではない。世界的なアドベンチャートラベラーの1回（平均8日間）あたりの平均消費額は約3,000ドル²⁵⁾で、訪日外国人旅行者の平均消費額15万8,531円²⁶⁾の約2倍になる。アドベンチャーツーリズムは、一般的な観光商品と比べて、環境へのインパクトを抑えながら経済効果を生み出し、安定した雇用創出効果も期待できると考えられている。

アフターコロナの局面では、少人数で、密になりやすい都市部を避けたエリアへの注目が高まることが予想され、自然やアウトドアは親和性が高いと考えることができる。国内旅行への関心や意識が高まる中、今までは都市部に訪れていた観光客が地方部を周遊し、その土地ならではの体験を楽しむコト消費が再評価されている。アドベンチャーツーリズムの推進によって自然体験型観光コンテンツの充実を図り、旅行者にとって忘れられない旅行を提供するとともに、地域の人々や環境・社会・地域経済にも貢献し、さらに地球規模の課題解決を目指すツーリズムの在り方が求められている。

4. おわりに

エコツーリズムを取り巻く自然や環境は、地球規模で大きく変化している。日本では、2020年に、国会において気候非常事態宣言が採択された。災害に近いと表現される猛暑や、毎年のように続く台風や豪雨の被害は、気候危機と呼ぶべき状況であることが指摘されている。さらに新型コロナウイルスの拡大によって、ニューノーマルや3密回避という考え方が、社会で急速に広がっている。ポストコロナの観光を考えていく上において、エコツーリズムはその存在価値をさらに高めていくと考えられる。

自然と調和しながら地域ごとに独自の暮らしの文化や美意識を作り上げてきたエコツーリズムの概念は、世界で認知され始めているサステナブル・ツーリズム国際認証の取り組みと合い通じるものがある。例えばGTSC（Global Sustainable Tourism Council）は、UNWTOや国連財団などが連携して設立され、グローバル基準で信用のおける認証基準を定めている²⁷⁾。観光産業における経済的な恩恵を最大化し、マイナスの影響を最小化することを目的として、地域における独自の指標を定め、モニタリングする仕組みを構築していく国際的な動きは、自然を活かした観光を後押しする契機となるだろう。

本実習に参加した学生の事後レポートからは、「エコツーリズムと聞いて今まではアクティビティのことしか思い浮かばなかったが、包括的な概念であることがわかった」「観光業者やガイドの収入源となっている自然、景観、伝統芸能等は、その土地に住む人々によって守られてきたことがわかった」「自然や島民の暮らしから得られた収入やサービスをその源泉に返すことが必要」「持続可能な観光を実現するためには多くの人との協力が必要で、お互いの信頼関係が重要となる」「小さな生き物からイリオモテヤマネコ、そして私たちの生活まですべてつながっていることがわかった」「保全を考えるためには実態の把握と原因の特定、対処の方法を検討しなければならないがとても難しい問題である」といった記録を確認することができた。

自然資源を活かした持続可能な観光を実現するためには、地域が有する地形や自然環境、人的資源、伝統文化などそれぞれの地域の特性を把握し、活用することによって、地域を活性化していくことが重要である。自然資源を観光利用する際には、適切に管理することによって自然からの恵みを損なわないようにしなければならない。そのコストを地方だけで担っていくのは困難であるため、エコツーリズムなどで得られた収益の一部を保全活動に還元することや入域料を集めるなどの取り組みが必要である。観光を活用した人的な交流、経済活動、管理のための資金の支援などは、自然資源を活かした持続可能な観光を支える基盤となる。

今後は、離島での実習にあたり新型コロナウイルス対策を講じた上で、運営方法を検討していく必要がある。これまでのプログラムは、島民との直接的な交流等を積極的に設定していたが、ニューノーマルな考え方にに基づき、島内での過ごし方全般を見直さなければならない。沖縄地域研究センターと連携して運営方法を検討していきたい。テーマとしては、引き続き自然資源を活かした持続可能な観光について掲げ、これまでの実習内容をフォローアップしつつ、世界自然遺産への登録に向けた取り組みの経過観察とアドベンチャーツーリズムの視点を取り入れて、実習内容をリニューアルしていく予定である。

註

- 1) 東海大学沖縄地域研究センター (2020)
- 2) 海津・真坂 (2001) pp.213-216
- 3) 竹富町 (2020a)
- 4) 白石ら (2017) は、観光ツアー事業者およびガイドの利用実態調査を実施し、西表島で活動する観光ツアー事業者数は、1970年代後半は2業者のみであったが、2014年には少なくとも90業者が活動していることを確認している。2000年代以降は、スノーケリングやシーカヤックの増加と、洞窟や滝を利用したプログラムなどアクティビティが多様化していることを明らかにしている。
- 5) 環境省西表自然保護官事務所は、ヒナリエリアの利用者数をセンサーでカウントしており、1日の最大利用者数は、ヒナリエリア全体で約360人、年間推定値は4万人強と試算した。八重山毎日新聞 (2020)
- 6) 朝日新聞 (2017)
- 7) 環境省 (2020a)
- 8) 環境省 (2016)
- 9) 八重山日報 (2020)
- 10) 読売新聞 (2020)
- 11) 井上ら (2016) p.19
- 12) 環境省生物多様性センター (2016)
- 13) 環境省生物多様性センター (2019) pp.4-5
- 14) 竹富町 (2020b) p.20
- 15) 祖納集落における暮らしの文化に関する記述は、実習中に行われた沖縄地域研究センターの崎原 健氏によるレクチャーを踏まえて書き起こしたものである。
- 16) 竹富町 (2020b) p.22
- 17) 海神祭に関する記述は、実習中に行われた沖縄地域研究センターの水谷 晃氏によるレクチャーを踏まえて書き起こしたものである。

- 18) 日本経済新聞（2007）
- 19) 星野リゾート西表島ホテル（2020）
- 20) リゾートは、環境負荷軽減の取り組みとして、客室には、歯ブラシ、くし、カミソリを常備せず希望者
にのみフロントで配布する工夫でゴミを削減し、ゴミ処理はリゾートとは別の場所で独自に炭化処理し
て再資源化を行っている。汚水は、3 次処理を施し植栽等に利用している。ウミガメの産卵に配慮して、
夜間は海側の宿泊客の協力を得て遮蔽カーテンをし、ガラス張りのレストランも照明を落とし、明かり
が外にもれないようにするなどを行っている。
- 21) 日本経済新聞（2019）
- 22) 観光庁（2019）p.4
- 23) Adventure Travel Trade Association and George Washington University International Institute of Tourism Studies
（2020）p.8
- 24) Adventure Travel Trade Association（2017）
- 25) UNWTO（2014）pp.10-11
- 26) 観光庁（2020）
- 27) Global Sustainable Tourism Council（2020）

引用文献

- 朝日新聞（2017）「世界遺産候補の奄美・沖縄、調査終了——観光客増、対応が課題」（2017 年 10 月 21 日、朝
刊）p.5.
- Adventure Travel Trade Association（2017）“Practical Applications, Trend Predictions Based on New Adventure Traveler
Research,” February 6, 2017, <https://www.adventuretravelnews.com/practical-applications-trend-predictions-based-on-new-adventure-traveler-research>（閲覧日 2020 年 11 月 30 日）.
- Adventure Travel Trade Association and George Washington University International Institute of Tourism Studies（2020）
2020 Adventure Tourism Development Index, Adventure Travel Trade Association.
- Global Sustainable Tourism Council（2020）“Certification,” <https://www.gstcouncil.org>（閲覧日 2020 年 10 月 12 日）.
- Hardin, G.（1968）“The Tragedy of the Commons,” *Science*（American Association for the Advancement of Science）,
vol.162, No.3859, pp.1243-1248.
- 星野リゾート西表島ホテル（2020）「館内施設」<https://iriomotehotel.com>（2020 年 10 月 18 日閲覧）.
- 井上太之・水谷 晃・北野 忠・南條楠土・河野裕美（2016）「西表島網取湾のウダラ川における魚類相および
甲殻類相」『西表島研究 2015 東海大学沖縄地域研究センター所報』, pp.19-32.
- 海津ゆりえ・真坂昭夫（2001）「西表島におけるエコツーリズムの発展過程の史的考察」『国立民族学博物館
調査報告』第 23 巻 pp.211-239.
- 観光庁（2019）「地域の自然体験型観光コンテンツ充実に向けたナレッジ集」
<https://www.mlit.go.jp/common/001279557.pdf>（閲覧日 2020 年 11 月 2 日）.
- 観光庁（2020）「2019 年の訪日外国人旅行消費額（確報）」<https://www.mlit.go.jp/kankochu/content/001338023.pdf>
（閲覧日 2020 年 11 月 21 日）.
- 環境省（2016）「西表石垣国立公園の公園区域及び公園計画の変更の概要」（報道発表資料, 2016 年 4 月 14 日）
<https://www.env.go.jp/press/files/jp/102606.pdf>（閲覧日 2020 年 10 月 22 日）.
- 環境省（2020a）「推薦地の特徴」<http://kyushu.env.go.jp/okinawa/amami-okinawa/description/index.html>（閲覧日 2020
年 10 月 3 日）.

- 環境省（2020b）「持続可能な西表島のための来訪者管理基本計画」（環境省地域連絡会議西表島部会）
<http://kyushu.env.go.jp/okinawa/amami-okinawa/plans/ecotourism/pdf/z-6-j.pdf>（閲覧日 2020 年 11 月 25 日）.
- 環境省生物多様性センター（2016）「西表石垣国立公園石西礁湖及びその近隣海域におけるサンゴ礁モニタリング調査報告書」http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/pdf/h28_Iriomote-Ishigaki.pdf（閲覧日 2020 年 10 月 26 日）.
- 環境省生物多様性センター（2019）「2019 年度 モニタリングサイト 1000 ウミガメ類調査報告」
http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/pdf/2019_seaturtles.pdf（閲覧日 2020 年 10 月 26 日）.
- 環境省那覇自然環境事務所（2014）『平成 25 年度西表石垣国立公園における登山道適正利用推進業務報告書』.
- Michelin Travel Publications（2020）*Michelin Green Guide Japan, Vol.5*, Michelin.
- 水谷 晃・井上太之・井上嵩裕・竹中康進・河野裕美（2018）「アオウミガメによるウミシヨウブの摂餌を軽減する手法の有効性の評価」『西表島研究 2017 東海大学沖縄地域研究センター所報』, pp.33-45.
- 日本経済新聞（2007）「西表をほりおこす会会長石垣金星氏——エコ観光や伝統文化継承に奔走（きらり）」（2007 年 6 月 9 日, 地方経済面 西部特集）p.34.
- 日本経済新聞（2019）「国立公園、観光客が守る、ガイドツアーや入場料徴収、生態系保護費用に」（2019 年 1 月 10 日, 大阪夕刊）p.18.
- 白石 綾・藤野裕弘（2017）「世界自然遺産候補地『西表島』の観光における自然利用の現状」『西表島研究 2016 東海大学沖縄地域研究センター所報』 pp.67-74.
- 竹 富 町（2020a）「平成元年～令和元年 竹富町入域観光客数（年別）」
<https://www.town.taketomi.lg.jp/administration/toukei/kankonyuiki/1531308472>（閲覧日 2020 年 10 月 20 日）.
- 竹 富 町（2020b）「竹富町年齢別人口一覧表（令和 2 年 11 月末）」
https://www.town.taketomi.lg.jp/userfiles/files/page/administration/toukei/jinko/ichiran/jinko_ichiran_R2_11.pdf
（閲覧日 2020 年 12 月 2 日）.
- The World Tourism Organization (UNWTO) (2014) *Global Report on Adventure Tourism*, UNWTO.
- 東海大学沖縄地域研究センター（2020）「概要」<http://www.orrc.u-tokai.ac.jp/index.html>（閲覧日 2020 年 10 月 1 日）
- 八重山毎日新聞（2020）「ヒナイエエリア利用制限へ 竹富町」（2020 年 1 月 22 日）.
<https://www.y-mainichi.co.jp/news/36082>（閲覧日 2020 年 10 月 20 日）.
- 八重山日報（2020）「入島料支払い、旅行者の 1 割——導入 1 年、財団厳しい運営 竹富島」（2020 年 9 月 5 日）
<http://www.yaeyama-nippo.co.jp/archives/13101>（閲覧日 2020 年 10 月 2 日）.
- 読売新聞（2020）「富士入山料「目的税」検討——徴収義務化 県、任意の不公平解消へ」（2020 年 11 月 18 日, 東京朝刊）p.23.